

## 家族解体の要因分析について

教 授      三   好   豊 太 郎

### 一、はじめ

家族は夫婦を中心として、家族成員がその生活を共にしている。かかる家族集団を維持するために役割的、愛情的、生物学的機能をおこなっている。それらはいずれも家族成員の欲求の充足に関連しているから、これらの機能が十分に実現されていれば、機能間の活動がよく伝達され、心的相互作用が適正におこなわれ、その組織や調整が均衡を保つことができるが、これらの機能の中のどれかが、その活動を減退すると、その遂行にあたって心理的な対立や興奮がおこり、摩擦や緊張があらわれ、その結果は別居・離婚などを起こしてくる。

かかる機能の遂行は多くは外部から客観的に観察することはできないから、外面的には親密と見える夫婦が突如として、別居や離婚を発表することがある。しかしそれらは相當の期間に亘って、内部的には夫婦間の摩擦や緊張があったものと想像することができる。したがってこの間は外見上は夫婦の家族関係であっても、実質的には相分離した解体家族の状態にあったといえることができる。

だから家族解体は必ずしも外部的な分離ではなく、その以前にさかのぼって、意見の対立や情緒的興奮状態がつづいた時にはじまるものと見ることができる。

かかる家族解体の影響を最も敏感に受けるのは児童であり、多くの非行少年の研究によれば、それらの発生は

家族解体に基づくことが多く、特にW・グードの述べるところによれば、少年の非行化は正常家族よりは解体家族に多く、その中でも両親の死別家族よりは離婚家族に多く、単なる離婚家族よりは緊張のさ中に生育する児童に多い。註(一)

また家族解体の結果相手方並びに自己に対する影響として最も深刻なものは自殺である。かかる自殺と家族解体との関係については、すでにE・デュルケームは離婚や別居のような家族解体による状態が自殺と密接な関係があることを述べている。□。彼によれば全ヨーロッパにおける自殺の数は、離婚及び別居の数に比例して変つてゐる。即ちヨーロッパを離婚及び別居の多い国、離婚及び別居のやや頻繁な国、離婚及び別居の少い国の三つとして、各一年の離婚数の結婚に対する比率を求め、それと自殺者の率を対照し、それぞれ三つの平均を求めると、離婚及び別居者が三倍となり、また六倍となる毎に、自殺者もこれに準じて増加している事実をあげている。この事はスウイスの一国内の諸州においても、同様な方法によつて地域による離婚及び別居の多少と、自殺者の多少との間の関連が見られた。フランスの各県において、自殺者の人口一〇〇万に対する比率の多少によつて、それを八群にわけ、それぞれ離婚及び別居の結婚にたいする比率を比較した結果、自殺の多い群になつたがって離婚や別居がそれと一致して多くなつたことを認めた。

またドイツにおける独身者、夫婦、やもめ、離婚者の自殺率をあげ、一般に離婚者の自殺は、独身者や夫婦やもめよりはいずれも多く、特に夫婦のそれに比べて、三、四倍も多いことを明らかにした。

これらの事実によつて見れば、家族解体の及ぼす社会的な諸影響が重要であることが明らかである。

## 二、家族解体の概念

一九二六年にE・モラーによつて「家族解体」が発表されてから、多数の著書が出版されている。ここにはそれらの中から、その外に代表的と見なされるM・エリオットとF・メリルの著作である「社会解体」及び、M

・クリナードの「逸脱行動の社会学」をとり、それらの家族解体についての概念に関する意見を参考にして進めることにしよう。

(1) E・モラー

家族解体については先駆的な代表的著書であり、家族解体を主題として、統計的にまた事例研究的に研究した結果をまとめたものである。彼の要旨をあげると、(三)

「家族はすでに離婚や置去りの研究によって証明されているように、単に接近している集団ではない。各家族はそれぞれに独立して発展し、文化的集団として成立するものである。そしてこれらの特徴づけている態度や理想が組織されたものである。即ち家族的なほこり、家族的な偏見、外部の人にはわからないし、れや通り言葉、外の家族と違った希望や野心などが家族的な固定観念を作り上げている。これは家族を協力する単位として作り上げるものであり、その家族成員に感じられているものである。

だから家族の成立は凡ての家族成員が助けあうように、組織的な態度を育成する過程である。家族の解体はかかる家族の固定観念が破壊され、家族の個々の成員の野心や理想が、分化し、独立するような、育成とは反対の過程をあらわすものである。

結婚や離婚に対する法律的な制限はこのように家族の態度が成立し、中絶し、分解することを地域社会や国家によって承認しようとするものである。したがって結婚や離婚の制度は根本的な意味においては家族を作ったり、消失させるものではない。家族は成員の相互作用によってその進行をはじめものである、適当な時期において、国家が家族の社会的位置を形式的に承認するものである。」

これによれば彼は家族解体の概念は家族固有の集団観念が破壊され、家族成員の野心や理想がそれから分化し、家族が組織と統一に向って進んでいくのと、反対の方向に移り行く過程であると述べている。したがって家族結合の意識的感情的な分離が家族解体の指標となることを示している。

(2) M・エリオット及びP・メリル

この両氏の著書「社会解体」は社会解体の全般について、個人的解体、地域的国家的解体、國際的解体などにわけて研究すると共に、家族解体の問題を扱い、その中で家族解体の概念について次のように説明している。四

「家族解体は数種類の家族類型の中、ある種の不調和な機能を営む家族類型である。このような家族解体は夫と妻との緊張ばかりではなく、親と子との間にも同様に起るものを含んでいる。親子間の緊張もたとえ永久的な摩擦にならないにしても重大な問題となることがしばしばある。このような不調和はいずれも研究を要する問題であるが、夫婦間の不和の問題は他の如何なる家族中絶の問題よりも一層きびしい社会的な意味をもっている。

もしも夫婦が社会的に承認された原則をおかしたとすれば、それは直ちに集團の基本的な価値に対する抗議として、解釈される。それに対して親子が愛や責任についての問題をおこしたとしても、前者に比べるほど家族生活を脅かすものとはならない。したがって家族解体に関する研究はここでは夫婦間の緊張によって生ずる夫婦関係の断絶に制限することにしてしよう。結婚による調和ある社会関係は現在の社会においては家族関係を結合させる中心の紐である。この紐である社会関係が破られると一般に定義されている家族は同時に破壊される。かようにして家族解体は文字どおり社会解体をあらわす。何故ならそれは第一次集團の特徴である親密な調和を破壊するからである。家族集團の存在は社会における機能上の単位として、多数の人間関係の結合にもとづいている。これらは家族の成員が他の人間と協力してその役割を演ずる相互関係的なものである。したがって家族の解体はまさしくこれらの集團関係を破壊するものに外ならない。

家族解体に関して、外面的な特徴である隠去り、別居、離婚、扶養の失敗、身体的暴力、悪口などによって判断する傾向がある。しかしこれらの特徴は、家族内の親密な関係の破壊についての表面的な徴候であるに過ぎない。表面上正常だとする家族生活が事実上はでっちあげである場合が多くある。例えば宗教上の信仰が離婚を許さないために、すでに夫婦愛がないのに表面上の家族生活を行うばあいがある。妻が経済的自活能力がないた

めに、尊敬し得ない天と同居することを余儀なくされている場合もある。この外にも子供に対する義務のために、表面上の家族生活を行なうなどの多くの事例がある。それらは何れも外部的な圧力によって、表面的に家族があるだけで実質的にはすでに解体家族である。」

これらの考察の中には家族解体を表面的なもののばかりではなく、内面的な親密な調和の破壊の問題にまで進めようとする立場があらわれている。

(3) M・クリナード

彼が「逸脱行動の社会学」の中の夫婦及び家族的役割の摩擦の概念の中で述べているところによれば、(四)「家族を結ぶ力である信念と期待とが、十分に残存するときには、家族はその機能を行なうことができ、夫婦集団をなす個人は割合に緊張から免がれ、相互作用をすることができ一単位を形成している。そしてかかる状態にある家族は組織され、すべての家族成員が一致する組織的な態度が育成される過程となる協力が成立する。それはあい関係する組織を作りあげる状態と役割であり、また共通の目標や価値の網状組織であり、ここにはじめて役割の相互分担の態度や期待が生れるのである。かように家族成員が同じ期待や目的を分担したり、その人々が一致して行動することができれば、家族成員の毎日の要求は一般に満足される状態にある。しかしかかる理解や役割の作成にたいする妨害がしばしば家族の内外から起ることがある。これが起ると各家族成員の間に一時的な摩擦がでてくる。この摩擦が継続すると全体としての家族の単位に影響してくる。同様にして家族が部分となっている社会の変動も家族の構造に衝撃をあたえる。例えば不景気は父親を失業させることになり、家計維持の役割をかえることになり、家族成員の態度と期待に影響し、何等かの家族全体の網状組織の關係に大きく影響するであろう。」

すなわち彼によれば家族間の摩擦は理解や役割の作成に対する妨害から生ずるもので、それが継続することとして家族解体が捉えられている。

これらの諸説について総合すると、家族解体はいつれも、基本的には夫婦間の機能がそれぞれ、独立し、不

調和であり、摩擦状態にある諸徴候として捉えられている。これらは要約すれば夫婦間の心理的過程を現わすものである。したがって家族解体の概念としては、夫婦間における正常でない心理的過程から成る社会関係であるということができる。

### 三、家族解体の類型

家族解体の形態は甚だ多様であり、その中には家族の緊張にはじまる広汎な範囲が含まれる。そしてそれぞれに特質、影響、要因を異にしている。したがってこれらを全体的に理解するためには、幾つかの類型に分けて、観察し、帰納することが必要である。ここにモーラー、グード、クリナード等の類型について検討することにする。

これらの研究者の類型分類の基準はそれぞれの研究の力点の相異と共に、違っている。即ちモーラーにおいては主として一〇〇ケースの家族解体を実際に調査した資料に基づいて、主として家族間の緊張を生じた要因を四つの類型にわけ、一、夫婦間の愛情の反応の非両立性に基づく緊張、二、経済的個人主義に基づく緊張、三、文化の個別化による緊張、四、生活経験の個別化による緊張に分け、それぞれに代表的な事例をあげている。(四)

これに類似するものはエリオットとメリルの類型であって、モーラーと同様に緊張を対象とし、その類型を第一次緊張として、特に個人的要因によるもの、第二次緊張として社会的要因によるものをあげている。(四)

W・グードによるものは主として家族解体を役割における意志決定の要因によってとらえ、五つの類型に分けている。即ち、一、未完成家族、二、一方的意志による解体、三、貝殻家族、四、自然的外部的要因による解体、五、家族内の要因による解体がそれである。(四)

またクリナードによれば主として家族成員間の期待と実現に基づく摩擦の形態を家族成員の構成体系によって分けている。即ち一、夫婦間の摩擦、二、夫婦と他の活動との摩擦、三、親子間の摩擦、四、夫婦と姻戚間の摩

擦がそれである。(u)

これらの家族解体の類型をわけることにより、まずそれぞれの類型間の特質を発見することができ、それに基づいて類型間の相互関係や因果関係の研究にたいする重要な手がかりを得ることができる。このほあいにおける類型研究の任務は家族解体の全分野をまづ体系的組織的に網羅することであり、個々の分野だけを精細に理解することではない。かかる個別の分野の研究はその後において序を追って、研究を展開すべきであると思われる。このような研究序列の必要からいえばW・グイド及びクリナードの類型は最も適切であって、各種の家族解体の類型がすべてこの体系の中に含められる。この中W・グイドのそれは拙著「社会福祉概説」(下巻、家族解体の類型の項以下)に詳細に説明してあるから参照されたい。

#### 四、家族解体の進行過程

家族解体は漸次的に段階を追って進行するのが普通である。そして如何なる結婚も前述した概念による何等かの形態によつて解体する時点をもつものである。即ち最初の愛情や結婚の新鮮さが減退した後に、単調な日々の生活の型がはじまり、多くの不満や困難、それから逃れようとする数多くのことが試みられる。その外にも小さい出来事がおこり、やがて相手の一方は結婚以前の方が結婚後の生活よりは、一層仕合せであったと感ずるほどそれが頻繁におこってくる。M・クリナードによれば「いづれの離婚を見ても、その進行の過程中に感情の衝突、愛情の減退、意見の不一致への後退が何度も反覆される」といっている。(v)

かくして夫婦関係は益々対立し、愛情の減退となり、何等かの調整を見ない限り、後退していく。

これについてH・ロックは典型的な離婚への進行過程を次のように表示している。(w)

一、家族成員間の緊張と困難との進行。

二、自分だけの摩擦上の意見の検討。

三、摩擦を公然と表明する。

四、夫婦間の困難を解決しようとする方法を時々試みる。

五、居室を別にする。

六、相手に離婚の可能性のあることを告げる。

七、別な住所に別居する。

八、一時的な和解をする。

九、離婚への申し出をする。

一〇、申し出を忘れさせようとする。

一一、離婚を再び申し出る。

一二、申し出を忘れさせようとする。

一三、離婚を三度申し出る。

一四、離婚を確定する。

一五、相手からの解放を達成しようとする。

一六、離婚の危機を調整する。

このようにして幾度となく離婚を決意しては躊躇し、最後まで決行を延期する。しかしその事は自然に解決方法への感情的な焦慮となり、種々な家族解体への類型へと進行していく。これらの経過の進行について、M・クリナーは次のように述べている。(三)

「結婚上の不幸の経過は取消、別居、置去り、離婚にまで到達しない幾つかの方法がある。ある人は困難な結婚上の過程を逃れるために、幻想や空想の世界にひたる。そして映画、小説、テレビなどを求めて、それから逃避しようとする。また慢性的な病気になる人もある。アルゴールの刺激を求めるものもある。このように摩擦に



よる家族内での相互関係を最低限にして、欲求不満状態から逃れようとする手段としては家事、仕事、ゴルフ、音楽、クラブ活動などがあげられる。その他の方法としては子供に対する過度の愛情やその将来への関心によって欲求不満を解消しようとする。」

これらの進行過程の間に、さらに中絶的欲求不満の機能が増進するばあいには、さらに種々なる家族解体への形態へと進行する。

##### 五、家族解体要因への統計的接近

家族解体問題の解決にあたっては、その前提として、家族解体が成立する要因についての研究を進めねばならない。

すでに述べたところによって、家族解体は広く、全体社会または地域社会の社会経済的、文化的な要因と密接な関連を持つことが明らかであるから、それらを巨視的に統計的方法によって研究することが多くの学者によって試みられてきた。

この点については既にデュルケームの研究をあげたが、モラーはさらに新しい統計によって各国における離婚率の年次別変動をあげている(三)。即ち人口十万に対するそれが、一九〇一年においてヨーロッパ諸国が何れも三〇以下であるのに、日本は一四〇を占め、著しい特徴を示し、さらに一九二二年には日本は八八となり著しい減少であるのに、ヨーロッパ諸国はいづれもフランスの六〇を先頭として増加している。

この点アメリカはこれよりも特徴的であって、日本とは反対に一九〇一年の七九から、一九二二年の一四〇に至る急激な増加を示している。

また彼がアメリカの都市と農村とについて比較したところによれば(一九二三年)結婚一〇〇に対する離婚数は農村七に對し、都市約一四である。即ち都市は農村の二倍あることを示している。これらは各国における文

化の発展、工業化または都市化と離婚との密接な関連を示している。

W・グロッドはさらに家族解体の各類型毎に統計的接近を試みている(四)。なかんずく一方的意志による家族解体については、特に離婚の年次別変動にたいする景気変動や戦争の影響、社会階級の相異、教育程度の多少、職業の区分、所得の多少などが離婚数と密接に関連していることを述べている。即ち彼によれば離婚は好景気の時、戦争の後、社会の下層階級、教育程度の低いばあい、職業がサービス業や単純労働者であるばあい、所得が少いばあいに多く、それに反するばあいにいづれも少いことを明らかにしている。

これらの統計的接近によって得られる結果は、家族解体の要因の研究に対して、重要な示唆を与えている。しかしそれらの中、特に統計を作成するに当って、事務報告の方法によって得られる資料に基づく統計的接近については、モラーは二つの注意を必要とするとしている(五)。その一つは非成文的な地方的慣習が家族解体に対して、大きな相異のあること。その二は統計資料の操作の困難性である。前者については例えば地方的な慣習は成文的なものでも、非成文的なものでも、家族解体そのものを規定し、その形態や程度を決定するものである。しかるに統計はその中の成文的な規定によるものだけしか現わさない。後者については例えば離婚に対する判決や置去りに対する陳情書は原告が住む地域の法廷記録の一部にすぎない。これらの公表された記録は計算されて、家族解体の統計資料となるけれども、最終において法廷の問題とならない多くの夫婦間のかかれた緊張や抑制された争いについては、何等記録されない。これらの点からいって一国内で相異なる法律のあるばあいは勿論であるが、同一法律をもつばあいでも、関係当事者の態度の相異があるために、家族解体の判断を異にし、その統計的資料は大きな違いがある。

この事は家族解体における統計的接近について注意すべき問題を提出している。

#### 六、家族解体の事例研究的接近

すでに述べた家族解体の過程の概念はいくつかの解体過程の要素間に、複雑な有機的關係の存在することを示すものである。この見地からする家族解体の研究に當っては、かかる有機的關係を発見する分析方法による作業を必要とする。

このように人間の行動が有機的体系を構成しているという仮定に基づく研究方法は家族解体の研究にあたつて、事例研究の方法を採用させるようになった。この分野を開発したE・モラーによれば彼のいう事例研究の方法(Case Study)は二つの源から導入されたものとしている(四)。即ち歴史の研究とケースワークの方法がそれである。歴史は社会に関する広汎な事実を蒐集することにより、傾向や大勢の判断を解決しようとする。歴史の分析に於ける個々の事例はかくして、一面において各種の傾向が有機的に関連している時期、時代、世紀との関連を示すものである。

ケースワークについてはその分析にあたつてしばしば統計的方法に依存するけれども、その運用の性質上有機体を構成する小さい単位である個人を診断し、処遇することを本来の任務としている。

かかる意味において、事例研究の方法は調査者自身が特定事例に対処することを主とするものであるから、前述したような統計的方法の欠点を排除することはもちろんである。即ち既に述べたような統計的方法の未成熟によるものを除くばかりでなく、研究上きわめて重要な行動的事実にたいする科学的な定義を明確化することができる、それによりさらに精密な数量的研究に役立つことができる。換言すれば事例研究による方法は対象にたいして、孤立した特性や事件として研究するよりは、むしろその成立の過程が複雑な有機的関連によって進行することとを予想し、それに中心を置くものである。

E・モラーはこのような考えによって、ミリアム・ドネーヴンの日記の克明な分析を試みている(五)。そしてかかる方法をさらに多くの事例に適用することによって、現在の統計的方法の欠点を補い、より正確な数量的研究を発展させるものであらうとしている。

ミリアム・ドネーヴンは中産階級の家に生れ、高等学校で知り合ったアルフレッドと間もなく結婚し、独立した家をもった。アルフレッドは会社の事務員として働き、普通の都会的な若者としての欠点をもっていた。その後二人は住宅を転じ、ミリアムは職業につきアルフレッドは両親や友人と完全に離れた。その頃から二人の間には緊張がつづき、アルフレッドは時々家に帰らずミリアムも同様なことをし、遂に離婚することになった。

彼はミリアムの長い日記の全文をかかえて、詳細にこれを次の三点から分析した。一、二人に対する生態学的な文化的な力の影響を見ること、二、夫婦間の争いを事件の経過と結果によって概念的にとらえること、三、心構えと価値の観点から解釈することがそれである。

このようにして得た行動の経過を要約すると、

a、事例の類型

夫婦の役割についての考え方が各々違っている。

b、緊張の原因

ミリアムのロマンチックな理想の結婚が実現できなかった。

c、欲求不満充足の方法

一、満足な反応を得ようとする工夫の案出（ミリアムは働きに出て夫のために品物を盗む）

二、結婚生活に満足を得ようとして努力する。

三、刺激を求めようとして行動をおこす。（勝手な行為、飲酒、浪費、自動車旅行）

四、家政意欲の沈滞。

五、人生観の建て直し。

このようにして到達した分析の結果によって見れば家族解体の要因が相当明確にとらえられ、さらにそれに対する処置方法についてもある示唆が与えられた。

かかる事例研究的接近の結果は次第に集積され、最近においては夫婦間の欲求不満はそれぞれの役割の期待と実現の格差としてとらえる研究も発展するようになった。夫婦関係役割テストがそれである<sup>(9)</sup>。これについては更に別な機会に述べることになしよう。

### むすび

これらの諸考察を通して次の諸点が推論される。

家族解体の要因の分析に当っては、家族の機能に関連ある行動的事実について、十分な科学的研究による概念化を必要とする。今後さらにかかる事例研究的接近を深めることにより、個々の行動的事実についての関連の範囲やそれらの間における関連の比重が明確にされ、より精密な要因分析へと進展し得るであらう。換言すればこれらの行動の個々について、それを更に分解し、具体的な期待と実現の内容を十分に研究し、要因間の関連を十分に理解し得るような方法が解明されていくべきものと思われる。

(昭和四五月二月)

### 註

- (一) W. Goode, *Family Disorganization*, 1961. (拙著「社会福祉概説」下巻、昭和四四年)
- (二) E. Durkheim, *Le Suicide*, 1897. (飛沢・鈴木訳、昭和七年)
- (三) E. Mawrer, *Family Disorganization*, 1926.
- (四) M. Elliot and F. Merrill, *Social Disorganization*, 3rd Ed., 1950.
- (五) M. Clinard, *Sociology of Deviant Behavior*, 3rd Ed., 1968
- (六) E. Mawrer, *op. cit.*
- (七) M. Elliot and F. Merrill, *op. cit.*

- ④ W. Goode, op. cit.  
 ③ M. Olinard, op. cit.  
 ② M. Olinard, op. cit.  
 ① H. Locke, Predicting Adjustment in Marriage, 1951.  
 ② M. Olinard, op. cit.  
 ③ E. Gawrer, op. cit.  
 ④ W. Goode, op. cit.  
 ⑤ E. Mawrer, op. cit.  
 ⑥ E. Mawrer, op. cit.  
 ⑦ E. Mawrer, op. cit.  
 ⑧ 小山 隆 編「現代家族の役割構造」昭和四二年